

F-11 家族構成の変動要因に関する研究——都市近郊平地農村と山村の比較から  
高知大教育 鈴木 敏子

目的 わが国の家族構成は、1960年頃から急激な変動をみた。その要因の一端を探るために、私はかつて、過疎化の進行度が全国でも一、二番といわれる高知県において、人口減少率別に地域を類型化し、家族構成の変化の推移と差異を考察した。そして、1960年から70<sup>年</sup>の間の人口の減少率が大きい地域ほど、家族規模の縮小、単身者及び夫婦のみの世帯の増加、世帯の高齢化、等の変化が大きいことと確認し、さらに、特定地域を設定して徹視的な調査研究を重ねることを課題としていた<sup>1)</sup>。したがって今回は、高知県内のある都市近郊平地農村と山村の家族構成を比較検討し、家族構成の変動要因と見出していきたい。

方法 対象地域 山村——高知県土佐郡大川村

都市近郊平地農村——高知県宿毛市平田町

主たる分析資料 大川村——1977年8月現在の住民基本台帳

平田町——1977年6月現在の住民基本台帳

結果 いずれの地域においても上述の現象が顕著に認められ、とりわけ人口・世帯数とも急減した大川村の方が激しい変化をしていることは既述のとおりである。たとえば大川村では「夫婦のみ」と「単独」世帯で半数近くを占めるにいたりそのほとんどは高齢者である。大川村のその背景は「林業の衰退」「ダムの建設」「鉱山の閉山」による農林業家族の崩壊、労働力人口の流出にあり、平田町の場合は農業の衰退による農業家族の崩壊と宅地化による労働者家族の流入（農村地域の混住化）、などが考えられ、地域の産業構造の変化が農山村の家族構成に大きな影響を与えたものである。

1) 拙論「過疎化と家族構造の変動——高知県の場合——」『高知大学教育学部研究報告』第27号、第2部、1975年、pp1~13。  
『過疎地域の人口高齢化過程と老人の生活実態』『同上』第28号、第2部、1976年、pp9~32。